

東京の観光振興を考える有識者会議
議事録

令和7年7月7日（月）13：30～15：00
都庁第一本庁舎7階大会議室

【江村観光部長】

それでは、これより東京の観光振興を考える有識者会議を開会いたします。
本日は、御多忙の中、御出席いただきまして、誠にありがとうございます。
座長選任までの間、私、産業労働局観光部長の江村が進行役を務めさせていただきます。

まず、本日の会議資料を確認いたします。お手元には、議事次第、座席表、委員名簿、本会議の設置要綱をお配りしております。その他の説明資料は、卓上のタブレット端末で御覧いただけます。

次に、委員の皆様の出席状況でございますが、本日は委員15名中11名の皆様に御出席いただいております、伊達委員はオンラインでの御参加となります。

続きまして、今回から新たに御参加いただく委員を御紹介いたします。

國學院大學観光まちづくり学部教授、小林裕和委員です。

東京大学公共政策大学院客員教授、篠原康弘委員です。

歴史タレント・歴史作家、堀口茉純委員です。

どうぞよろしく願いいたします。

続きまして、座長の選任を行います。

本会議の設置要綱では、座長は、委員の互選により選任することとなっておりますが、委員の皆様、いかがでしょうか。牧野委員、よろしく願いします。

【牧野委員】

座長には篠原委員を推薦いたします。

【江村観光部長】

ただいま牧野委員より、篠原委員を座長にとの御推薦がございました。委員の皆様、いかがでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

【江村観光部長】

それでは、篠原委員に座長をお願いしたいと思います。

この後の議事進行につきましては、篠原座長をお願いしたいと思います。よろしく願いいたします。

【篠原座長】

東京大学大学院で観光を教えております篠原と申します。この席には大変著名な、かつ各分野で活動されている方がお集まりですので、ぜひ活発な御議論をいただければと思っております。どうぞよろしくお願いを申し上げます。

それでは、早速でございますが、会議を進行させていただきます。

初めに、小池知事から一言御挨拶をいただければと存じます。

【小池知事】

皆様、こんにちは。今日もうだるような暑さの中お運びいただきまして、誠にありがとうございます。

今回から篠原康弘座長を新たにお迎えをいたしました。観光庁での御経験などを踏まえまして、議論をさらに活発、そして実り多いものにしてくださることを期待いたしております。よろしくお願いいたします。

御案内のように、今年の訪都（東京都を訪れた）外国人の旅行者数でございますが、約2,479万人に上りまして、消費額のほうも約4兆円規模に上っております。いずれも過去最高を記録しております。これまでの様々な取組が実を結んで、多くの外国の方々が東京を訪れて観光を楽しむと。そして、それは経済の活性化にもつながっているということでございます。今後も世界から選ばれる都市であり続けられますように、東京が持つ多彩な魅力を存分に活かしていきたいと考えております。

そして、今回の会議のテーマでございますけれども、「観光の持続的な成長に向けた施策強化の方向性」といたしたところでございます。篠原座長、そして新たに御就任いただきました小林委員、そして堀口委員から今日はプレゼンテーションをいただきたく存じます。

東京の観光につきましての中長期的な視点、視野から御議論いただきたく、世界で一番の観光都市・東京の実現へとつなげていきたいと考えておりますので、どうぞ忌憚なく御意見をお聞かせください。よろしくお願いいたします。

【篠原座長】

小池知事、どうもありがとうございました。

それではまずは事務局から資料説明をお願いいたします。

【前田観光振興担当部長】

かしこまりました。

それでは、資料3「東京の観光の持続的な成長に向けた施策について」御説明いたします。

初めに、東京の観光を巡る動向です。2024年の訪都外国人旅行者数は2,479万人、消費額は約4兆円と、それぞれ過去最高を更新いたしました。2030年に3,000万人、2035年に4,000万人と、さらなる外国人旅行者の誘致を目指しておりますが、混雑やごみの問題なども懸念されています。東京の観光の持続的な成長に向けた今後の施策の推進につきまして、御意見をいただければと思います。

次に、人手不足の状況とAIの活用や観光DXの推進についてです。宿泊業など観光産業においては、引き続き人手不足や労働生産性の低い状況が課題となっています。労働生産性の向上やサービスの高付加価値化に資する観光DXの取組もまだ十分ではございません。一方で、昨今のAI技術の進展は目まぐるしく、世界では様々なサービスにも活用され始めています。人手不足の改善やAIの活用、観光DXの推進につきまして、御意見をいただければと思います。

続いて、江戸の歴史・文化を活かした観光です。昨年度の有識者会議での御意見、御議論を踏まえまして取りまとめた3つの取組の方向性を基に、事業を

展開しています。委員の皆様の机の上にバッジを配付してございます。「Edo Tokyo」の袋に入ったものです。今年の3月に「Edo Tokyo」というロゴマークを作成いたしました。観光PR動画の放映など、様々な場面を通じて江戸の魅力を発信し、旅行者や都民、事業者の方々と東京の魅力を共有する取組を行ってまいります。こうした江戸の歴史・文化を活かした観光の効果的な推進につきまして、御意見をいただければと存じます。

事務局からの説明は以上です。

【篠原座長】

ありがとうございました。

それでは、今度は委員の側からのプレゼンテーションということで、まず、私からプレゼンテーションをさせていただきます。

タイトルとしては、「観光についての問題意識」というふうにいたしました。

次をお願いいたします。これは私の自己紹介です。国土交通省で観光、航空等の仕事をしてきたということの御紹介でございます。

次のページをお願いいたします。このプレゼンテーションは、私は観光の意義について再度再確認ということで書かせていただきました。この観光の意義としては3つあると思っております、1つは、経済面で東京都、あるいは我が国全体の経済の発展の成長分野であり、また、我が国の外交、交流を含めたソフトパワーの源泉、さらには、地域への誇りとか愛着をもたらす社会活動であると、こういうふうに思っております。したがって、この観光というものを通じて、日本・東京都の礎を築くための活動として、しっかり最重要課題として取り組んでいく必要があるだろうと思っております。その際に、現状の延長線ではなく、先を見通したビジョンをぜひ持った議論ができたらと思っております。

先を見通したビジョンという意味では、観光分野では松下幸之助さんが1954年に著された「観光立国の弁」というのが大変有名でございます。こちらに7つの項目を掲げてございますけれども、2番目、3番目のところ、日本は大変美しい景観を持っていて、日本はその当時、輸出貿易で稼いでいたけれども、それは資源を消耗、減耗していると。一方、日本の観光資源は幾ら活用しても減らないということで、観光というものをもっと日本の中心産業に持っていくべきだと。4番目で、観光は大きな波及効果があり、5番目で、国際的な視野を広げる方策にもなると。さらに6番目で、大きな平和方策でもあるということで、こういう観光の多様で非常に効果のある性格を踏まえて、⑦で、観光省の新設や、観光大使を各国に送る、さらには人材育成のために観光大学を置くべきだというようなことも述べておられます。こういったような先を見通したビジョンを持った施策を打ち出していくということが大切かなと思っております。

次ですけれども、観光政策は、私、国土交通省で交通・観光政策をやってまいりまして、大変難しい分野であると思っております。と申しますのも、下のほうにちょっと図を描きましたけれども、まず、事業主体が大変多様な分野に及んでいるということ。その多様な分野の方々の連携のためのいろいろな団体もございしますが、これも地域・産業ごとに多様になっております。さらに、政策を行う主体が都や国や区市町村というふうに重層的に存在していると。さらに、客体としての旅行者、地域住民、そこには利害の対立もあるということで、それぞれが相互に複雑な相互連携関係を持ったエコシステムになっているということです。通常産業分野でありましたら、製造業でしたら特定の製造業の業種、あるいは従業員を考えていけばよいかもしれませんが、観光は大変対象が多様ですので、政策を打っても効果の測定が難しいですし、地域づくりなど、なかなか効果が出るまでに時間がかかるものもあります。ということで、観光政策は格段に難しい分野ですので、先ほど申し上げた、やっぱりビジョンを持って、長期的な視点も持って対応していく必要があるだろうと考えてございます。

次ですけれども、特に観光が発展していくためには、人財が集まる分野になっていくことが大事だろうというふうに思っています。残念ながら現状では、労働環境の問題、あるいは社会的なステータス・ブランド力が必ずしも十分ではありませんし、イノベーションも遅れており、コロナなどボラティリティも高いので、なかなか優秀な人材が目指す産業分野になっておりません。私は東大で観光を教えておりますが、観光を学びに来た学生たちに「君たちは就職したらどこに行きたいの」と聞いても、観光をやりたいという人で手を挙げる人は残念ながら1人もいないという状況でございます。このような状況が非常に残念だと思っております。実は観光産業というのは、考え方によっては、地方創生、国際交流、文化発信など社会課題に取り組む戦略的な分野であるというふうに考えることができますし、社会課題の解決に経営企画ですとかデジタルですとかAIとかDXとか今の最先端のいろいろな知見を持った方々が取り組んでいけば、観光分野のイノベーションがもっと進むのではないかと思っています。下にいろいろなアンケート調査の結果を出していますが、どうしても労働環境や社会的な地位とか見栄えとかいろんなところでなかなか集まらない産業分野の観光を、もうちょっとイメージ・ブランドアップを含めて考えていく必要があるんだろうと思っております。

次ですけれども、この人の問題に加えて、財源の問題は大変大きいかと思っております。特にインバウンド旅行者の急増に伴いまして行政需要も増大しているという中で、国では、今、国際観光旅客税という出国する際に1人1,000円を取っているこの旅客税を引き上げて、使途も拡大して、財源を充実させようというふうな議論が行われてございます。このような議論もありますし、行政

需要の拡大の中で最も宿泊税を最初に導入した東京都におかれても、さらに行政需要の拡大に対応した財源の充実の議論もいずれ必要になるのではないかなというふうに感じてございます。

次のページには、その国での議論の一端として、今年の5月に参議院の予算委員会で行われた議論を御紹介していますが、吉川議員という先生が、国際観光旅客税は1人1,000円だけれども、ほかの国は4,000円ぐらいとか7,000円とか、もっと取っている国もありますよと。もっと取っていいんじゃないかということ。この問題提起に対して総理からは、日本人の納税によって整備してきたインフラを外国人が使っているのだから、外国人にもっと負担をいただくということもあるんじゃないかというふうな議論を含めて、いろんな議論が国会で行われているということで、この議論の行く末も見つつですけれども、東京都においても財源の議論というのも重要な議論の対象の1つじゃないかと思っております。

そして最後でございますが、オーバーツーリズムが大変議論になってございます。私自身は、旅行者が増えるということは本来大変望ましいことであって、これを抑えるとか、ネガティブに受け止めるのではなくて、この需要増をどう活かしていくかという形に持っていくべきで、ある意味、観光が非常にプラスの効果地域にもたらしているんだということをもっと見える化することで理解も進むと思われまして、地域への誇り・愛着も育まれていくと思っております。フランス、スペインなどは、自分の国の人口の倍以上の人を受け入れています。そういう国は面積が広いじゃないかという議論があるかもしれませんが、例えば日本とその下のギリシャを見ると、ギリシャは人口の3倍を引き受けていて、面積は日本の3分の1でございます。こういったような他国の状況を見ても、まだまだオーバーツーリズムと言わずに取り組めることがあるんじゃないかというふうに考えてございます。

以上が私からのプレゼンでございます。ありがとうございました。

それでは、続きまして、小林委員からプレゼンテーションいただきます。小林委員、よろしくお願いたします。

【小林委員】

ありがとうございます。

改めまして、國學院大學観光まちづくり学部から参りました小林と申します。今日はどうぞよろしくお願いたします。

観光まちづくり学部は4年前にできた新しい学部でございます、今ちょうど4年生が就活を頑張っているところでございます。

まず私のほうからお話しさせていただきますのは、今日こちらに参加させていただくのは、私が観光DXに関わる研究を行っていることがきっかけだというふうにお聞きしております。インターネットが社会にどう影響を与えるか、あ

るいはどう変革するかということが私の興味の1つなんのですがけれども、こちらの図は1990年の初頭からウェブサイトの数を示した図ですなんですけれども、実はちょうど僭越ながら私が社会に入った頃も90年の初めでございまして、ちょうどインターネットが商用利用を開始して、常時接続を実現し一般の人に普及し始めたのが90年初頭と言われておりまして、それから皆様既に御存じのようなアプリケーションサービスがずっと出てきたというところでございます。

今日は自己紹介も少し兼ねておりますけれども、観光DX、あるいは観光経営、持続可能性につきまして研究をしてまいりました。残念ながら、観光分野におけるDX、スマートツーリズムと呼ばれていますけれども、この分野、やっぱり諸外国のほうが研究が進んでおるものですから、今まで日本の地域の事例を紹介しようと思ひまして、ここに出ているような会議で発表してまいりましたけれども、また今年の12月には、第3回となるのんですがけれども、スマートツーリズムの世界会議がありますので、こちらはジャパンセクションでチェアを務めさせていただく予定でございます。

また、観光DXにつきましては、最近、非常に社会的に関心を持たれているところでございます、国土交通省の審議会の技術部会にも観光の面から観光DXを推進する立場で入ってくれというふうにも言われておりますし、また、観光庁におかれましても観光DXの事業をちょっとお手伝いをさせていただいているところでございます。また、地域のお手伝いもさせていただく機会も多うございまして、例えばですけれども、道後温泉、こちら、昨年5年間の保存修理期間を経て本館がオープンしたところでございますけれども、まちづくりに関わる協議会の方々と一緒に、2050年ビジョンの中にデジタル温泉都市構想というところを一部つくっているところをお手伝いさせていただいたりもしました。

また、昨今、御承知のとおり、AIも観光分野で実装が大分進んでおります。こちら、技術の進展が非常に速いので、すぐ事例が陳腐になってしまいますけれども、だからこそ、やりながら、実装を進めながら社会に定着させることがとても大事かというふうに考えております。

さて、この後、私のほうから事例を2つ御紹介させていただこうと思ひます。東京が持続可能、あるいは中長期的に魅力ある都市、あるいは田園都市部となるためには、実は旅というのは、その記憶をつくるのは経験だというふうに考えております。

左側の図にトリップアドバイザーの日本版の図があります。ここに、ホテルを検索したり、観光を検索したり、レストランを検索したりというよく皆様御存じのサイトですけれども、この英語版、ページの右側を見ますと、日本語の「観光」と書いてあるところが実は「Things to Do」というふうになっております。つまり、「そこで何ができるのか」ということが実は重要でございます、ある研究によりますと、訪問客の記憶に残るといふのは、聞くことが10%、

読むことが30%、見ること50%、しかし、することというのは90%記憶が残るというふうにも言われているところがございますので、やはりそこで何ができるのかということが重要ではないかなというふうに考えるところでございます。

実際に観光の経験の提供主体というのは、中小企業が多うございます。そして、デジタルの力を使えば、商品をつくりますと、ガイドツアーをつくりますと、実はその日の何時間後には世界中に販売できるようなシステムも今ございます。そして、タビナカの経験価値を提供するのは、やはり中小企業が主体になるというふうに考えておりまして、また、つい先日、タビナカに特化した観光業界のイベントも開催されているところでございます。私はこのビジネスを地域旅行ビジネスというふうに呼んで提唱しているところでございます。

最後に、持続可能性につきまして少し触れさせていただきますと、観光すればするほど社会がよくなる。今は、観光すると、先ほどのオーバーツーリズムの話もありましたが、どちらかという社会に悪影響があるみたいなことが大分言われていますけれども。私は実は、最近ソーシャルアントレプレナーという分野もありますけれども、観光でも似たような分野がございまして、社会解決のために観光ができることというのがあるのではないかなというふうに考えておりまして、実際、諸外国ではこのような事例も多くあるようですので、ぜひ東京でもいろんなところで実現できるとよりいい地域になるのではないかとこのように考えております。

私の発表は以上です。どうもありがとうございました。

【篠原座長】

小林委員、ありがとうございました。

続いて、堀口委員からお願いいたします。

【堀口委員】

御指名いただきましたので、僭越ではございますが、お話をさせていただきます。堀口茉純と申します。

私は、歴史作家、歴史タレント、そしてお江戸系ユーチューバーという少し特殊な肩書きで仕事をさせていただいておりますので、簡単に自己紹介をさせていただきますと、端的に言いますと、私、いわゆるオタクでございまして、江戸の歴史・文化を愛好しております。

私が大好きな歴史・文化の魅力をよりポップに、ディープに楽しめるコンテンツに育てていきたいというような理念を持って活動しております。

そして、表現手法として重きを置いておりますのが、エデュケーションとエンターテインメントということで、教育に楽しさ、娯楽に学びといった形で歴史・文化を表現することによって、その価値がより広く認知されていくのではないかとこのように考えております。

そして、専門性のキーワードといたしまして、「江戸・東京」というのは、

私は生まれ育ちが東京なものですから、8月にも江戸・東京観光をテーマにした本を出版する予定になってございます。そして、「徳川将軍」といったところは、江戸・東京の礎を築いて、世界史上まれに見る天下泰平の時代を築いた、徳川の治世から現代人が学ぶべきところは本当に多いと考えております。そして、私、歴史オタクであると同時に、アニメ、漫画などの二次元のオタクでもございますので、江戸の歴史・文化の結晶である二次元媒体としての「浮世絵」。そして、「文化」、これは歌舞伎などの伝統文化から長屋の庶民文化までを研究対象にしております。

そして、具体的な活動としましては、下のほうに写真を載せさせていただきましたけれども、本を書くというようなところでしたりとか、NHKのラジオで13年ほど「DJ日本史」という歴史番組のMCを務めており、メディアでの活動などを継続しつつ、リアルの世界でも江戸・東京のまち歩きの観光ガイドであったり、インターネットでは2011年からお江戸系ユーチューバー、いわゆる歴史のインフルエンサーとして活動させていただいております。

まとめますと、本当に一市井の歴史・文化を愛するという立場で、常に市井は何を求めているのか、何なら刺さるのかというようなことに注意を払いながら歴史・文化の探求と発信をなりわいとしておるところでございしますが、そんな私が愚考いたします「観光の継続的な成長に向けた施策強化の方向性」というところに関しましては、やはりまず、外国人の旅行者の方々はもちろん、日本人、特に都民の方々への東京の歴史・文化の発信、啓蒙というものが非常に必要なのではないかなと実感しておるところでございします。

歴史・文化というのは、既に東京にあり、ほぼ無料と言っていいのか、既にある観光資産でありますので、そういったところを活用していく。先ほど篠原先生のお話でも観光の意義についての大変示唆深いお話がございましたけれども、東京に外から来ていただく観光客の方々へのアプローチと同時に、日本人、特に都民の理解促進というのが不可欠であろうかと考えております。

長期的な視点では、東京で生まれ育つ子どもたちへの教育などへの効果が期待されるわけなんですけれども、やはり東京は大学とかお仕事などで大人になってやってくる方もたくさんいらっしゃいますので、そういった意味では、東京に土地勘のない東京人、また東京に観光に来た日本人、そして外国人の観光客の皆様、いずれもが直感的に江戸・東京の歴史・文化の面白さ、楽しさ、これが分かる、伝わっていく施策というのを打っていくのが短期的、中期的に見れば非常に効果的ではないかと考えております。

具体的には、「江戸⇄東京ならではの体験」というところで、これはやはり既にあるものの活用です。例えば握りずし、天ぷらを食べるという体験ですら、何かの形でそれが実は江戸で発達した文化であるということが伝わればもう立派な食の江戸・東京の文化体験になりますし、また、右側にちょっと私が撮っ

た写真を掲載いたしましたけれども、この右側の写真は皇居の巽櫓というやぐらと大手町のビル群なんですけれども、私はこのお堀1本を隔てて400年前と現代が共存している景観というのが非常に好きでございまして、ほかにも神社仏閣の境内からスカイツリーが見えたりとか東京タワーが見えたりとか、本当に江戸・東京が当たり前のように共存している風景というのが東京にはたくさんあって、これが実は東京の個性であり強みでないかというふうに考えておりまして、こういった既にあるものの魅力というのをまずは都民が認識して、価値あるものとして発信していくことが重要なのではないかと感じております。

また、「江戸らしさを感じる、思わず写真を撮りたくなるような町づくり」というところに関しては、浅草という成功例がございしますが、浅草はやはりオーバーツーリズムなどの問題が懸念される場所ではあるかと存じます。東京には第2、第3の浅草になる可能性を秘めた場所が複数ございしますので、浅草を大事にしつつ、そうした新しい歴史を感じる観光地という場所が整備されていくことを期待しております。

そして次は、小林先生の先ほどの話とも重なりますけれども、やはり今ある歴史・文化のデジタルの活用ですね。私は、やはり歴史的景観の全てを復元するというのはなかなか大変なことなのかなと思っておりまして、むしろ、浮世絵や古地図、古写真など、最新の技術を駆使して活用することで、今ある歴史・文化というのを最先端の技術を使って活かす、東京ならではの新たな歴史の観光のモデルというのをつくり上げることもできるのではないかと期待しております。

以上のような施策に加えまして、歴史的な背景を加えたストーリー性であったりとか、もしくはスタンプラリー的なゲーム性なんかも絡めながら、回遊型の観光地として東京の滞在性というものを上げていき、東京のルーツである江戸への理解が深まっていけば、徳川幕府が理想とした世界史上まれに見る天下泰平の時代があったというようなことの認知にもつながっていくのかなというふうに感じております。

そして、江戸・東京を世界遺産へという目標が広く共有されることで、様々な分野の方々が東京の観光をキーワードに一丸となって大きなムーブメントをつくることのできる、そのきっかけになるのではないかなと思っております。

以上で私のお話とさせていただきます。御清聴ありがとうございました。

【篠原座長】

ありがとうございました。

それでは、アトキンソン委員からも資料の御提供をいただいておりますので、アトキンソン委員、どうぞよろしくお願い申し上げます。

【アトキンソン委員】

ありがとうございます。

まず、現状なんですけども、数字のように、2025年は今4,500万人を達成する勢いで増えていまして、もう既に5か月たっていますので、今のままでは間違いなく4,500万を超えるというふうに思っています。2024年に対して47.1%の増加で、2019年から15.6%増加になります。

次へ行ってください。これで見ると、アジアからのインバウンドというのは2019年から10.9%増えています。順調に増えていますけれども、多少最近は成長率が低迷しているような感じは受けます。

次へ行ってください。ただ、アジア以外、2016年に日本政府観光局を中心に欧米豪戦略が実行されることによって大きく増えていまして、これで見ますとアジア以外は前年対比で40.1%だったんですが、2019年、アジアの10%増に対して、アジア以外は40.6%増加しています。ディズニーがやっている「SHOGUN 将軍」という映画の公開もありまして、認知度がどんどん高くなっていますので、非常に好調になっています。

次へ行ってください。インバウンド全体で見ると、今年に入りまして前年対比で24.5%増加していまして、非常に好調になっています。

次へ行ってください。その中で、先ほど申し上げたように、ロングホール、欧米豪は4月に初の100万人近くになりました。4月は普通は前月対比で減りますが、大きく増えました。34.9%増加になっています。

次へ行ってください。アジア全体で見ると、去年で22.1%増加しています。

次へ行ってください。その理由は、中国を除くアジアというのは10.7%しか増加していなくて、ここに力を入れる必要はあると思います。

次へ行ってください。中国はまだ回復の真っ最中でありまして、前年対比で68.1%増加なんですけど、2019年に対して8.1%の増加にしかありませんので、ここはアジア全体で見るとまだ期待できる場所ではありません。

次へ行ってください。ということで、全体としては4,500万人を超えるということになります。外貨として10兆円になります。ここは重要なんですけど、外貨を言うことは非常に多いんですけども、観光庁の試算では大体1.9倍から2倍の経済波及効果がありますので、約20兆円の経済効果となります。今、各省庁の皆さんに対しても同じように要望をしていますけれども、ぜひ知事をお願いしたいですが、外貨の獲得だけではなくて、経済波及効果込みで情報発信をしていただきたいです。10兆の外貨だけではなくて、約20兆円の経済効果というような発言を加えたほうが正しいと思います。観光に対して、インバウンドに対してアンチの人たちは多少いますけども、必ず、外貨は大したことないじゃないかとい、言います。インバウンドは大したことないから、国内観光をどうするかということをおっしゃるけれども、それはそもそも経済波及効果を見ないのだから誤解をしているだけだというふうに思います。

それに関連しますが、先ほど御指摘ありましたオーバーツーリズムの問題

で、これもやはり一定のそういうアンチの人たちがいるんですが、大いに誤解をされています。それを正す必要はあると思います。世界の国々の中で人口に対するインバウンドの比率が高い順番で行きますと、実はオーストリアが一番高いんですね。3.4倍あります。それで、30位まで行きますと、日本はその中で28位です。非常に比率として少ない。これは2023年の数字なんですけども、30位まで行きますと、国民に対して大体59%の平均なんです。それに対して日本は2割しかないんです。今年4,500万人になったとしても36.1%、6,000万人の目標があるんですけど、それになったとしても48.2%しかありませんので、オーバーツーリズムではないです。オーバーツーリズムではなくて、急成長している中でインフラがそれに追いついていないということと、あとは、国、東京都もそうだと思いますけども、そこにインフラ投資が遅れているということなので、宿泊税を設けて、混雑しているところに対してどう設備投資をして対応するのかということになりますので、オーバーツーリズムではなくてマストツーリズム対応ができていないということが正しい解釈だと思います。

次は、御存じのように、2030年に6,000万人の政府目標がそのまま堅持されています。コロナがあったにもかかわらず、変えるという議論があったんですけども、そのまま維持するということが決断されたようなので、今、日本政府観光局を中心に、6,000万人を2030年までに確実に達成する新しい取組をやっている真っ最中です。今、新しいグローバルキャンペーンを立ち上げたばかりで、調査をやっている真っ最中です。これが来年から始まりまして、再来年にかけて徹底的に実行されていって、大いに6,000万人の誘致に貢献するということが期待されています。まず、その新しいキャンペーンが実行されるということをご共有させていただきたいと思います。

そのキャンペーンは何なのかと。知事は覚えていらっしゃると思いますけど、2014年からスタートしたグローバルキャンペーンは、無関心層にあびるものだったので、東京、それで日本全体としては認知を高めていって誘致をします。私としては、そのときに、認知を高めていって誘致をすれば口コミで人気が広がるということを経験として考えていたんですけど、それは大いに成功したというふうに自負しているところです。今回はその無関心層ではなくて関心層に対するグローバルキャンペーンが実行されます。要するに、訪日を考えているんだけど、まだ決めていない人。まず決めさせるためにどうすればいいのかということで、ぜひともに日本の観光の最大の誘致のところである東京都にも、同じように関心層に決定してもらうためにどうすればいいのかということをご力を合わせて、ぜひ共有させていただきたいと思います。

その問題の中で、東京と日本全体として観光しない理由は何なのかと調査されています。前回のグローバルキャンペーンで分かった問題はほとんど全部なくなっちゃっていますけれども、2つ残っている問題があります。

まず1つは、物価が高いという、間違ったイメージ—今はこれ以上に物価が安い先進国はないですが、高いという思われています。これをどうやって払拭するのかということをもまず考えなきゃいけないんです。

もう一つは、マナーに関する問題なんです。最近、多分、前回か前々回の会議に知事のほうから私に対する御質問があったと思いますけども、日本のマナーがあまりにも違い過ぎるとか、マナーに違反すると大変な目に遭うというようなイメージが出ているわけです。第2の問題としては、日本のマナーがきつ過ぎて、そこでやっぱり楽しくできないというイメージができています。これを非常に危惧しているところでありまして、マナーを守ることは重要なんですけども、あまりにも一方的にそれを押しつけることによって皆さんに来てもらえない、どうやってこのバランスを取るのかというのは非常に大事なことであるということをも、今回のグローバルキャンペーンでこの2つを含めて対策を打っていきたいというふうに考えています。

御報告と私の意見として意見を述べさせていただきました。ありがとうございます。

【篠原座長】

ありがとうございました。

知事はこちらで御退席となりますが、何か御感想などいただけますでしょうか。

【小池知事】

ありがとうございます。

今も数字でお示いただきましたように、コロナのときはひどく落ち込んだ、鎖国していたわけですがけれども、そこからむしろそれをバネにして観光客数が増え、今4兆円ということですがけれども、経済波及効果はその倍と言っていいというお話ですと8兆円。一方で、デジタル赤字は8兆円なんですよね。ですから、逆に言えば、観光でしっかりと稼ぐということが求められていると思います。

それから、世界の人口、80億人ですが、これからまた6,000万人を目指すとなるとどうしてもリピーターが必要で、そのリピーターの人に対しての魅力をどうするのか。それから、関心層の背中を押してあげる、これについてもいろいろ工夫も重ねていきたいと思っています。

インフルエンサーとかの方々、それぞれ国によって違ったりしますが、そういう一つ一つの相手の国と通じるパブリックリレーションズであるとか、それから、トゥドゥーが大事だというお話で、そこを教える小さな着物のお教室とか、それからおすしの握り方とか、すごく我々日本人でもやっていないようなことも教えたり、それから、お相撲を見て楽しむというのは、何かラスベガスにもありそうな感じのエンターテインメントですが、海外の方々を楽し

いと、また行こうというふうに思ってくれるような、いろんな細かいけれども刺さる、そういう工夫も東京都として進めていきたいというふうに思っております。

ちなみに、ここにはアンチはいませんので、大丈夫です。

では、ニューメンバーの方々も含めまして、どうぞよろしくお願い申し上げます。伊達さんもうありがとうございました。

では、先に失礼いたします。

【篠原座長】

では、知事はこちらで御退席されます。

(小池知事退室)

【篠原座長】

ありがとうございました。

それでは、ここからは皆様から御意見をいただきたいと存じますが、若干時間が押しているようでございますので、お一人当たり3分くらいの目安をお願いをできたらありがたいと存じます。

まず、オンラインで御参加の伊達委員からお願いできますでしょうか。

【伊達委員】

伊達です。

それでは、手短にということ、観光のマーケットは非常に安定していて、東京のニーズも高いというのは肌で感じるころなんです、それに対して今後持続させるためには、やはり需要だけではなく、供給側の課題というのを解決していく必要があると思っています。

その1つは、やはり箱、ホテルの数が足りているのかということ、そして、それをサポートする従業員数が足りているのかということだと思っています。

客室数に関しましては、データを見ますと、2019年から24年にかけて1.24倍に増えているようなのですが、データを見ますと、それに対して宿泊の延べ人数というのは1.4倍ぐらい増えているということになりますから、若干成長率施設の増加率は足りていない状態になります。

また、稼働率については、全国60.5%に対して、東京の場合は76.3%ということ。こうしますと、まだ余裕があるかというふうに思われるかもしれませんが、やはり繁閑というものがありますので、ピーク的时候には足りないという状況を引き起こしているということになります。今後、国内で6,000万人を目指すということは、今までと同じぐらいの成長率で言えば同程度で東京も伸びるとしたら、国内インバウンドの55%ぐらいを東京で引き受けるということになりますと、やはり足りなくなるということは考えられると思います。

しかしながら、今、建築費が非常に高いという状況になりますので、その中

で増やせるかというのは実はが課題がありまして、です。そういう中でやるべきことというのは、今度は既存の施設というのをよりよいものにして付加価値を高めていく、そして1人当たりの単価を上げていくということが必要なのではないかというふうに思いませんか。

次に、人の問題ですが、支える人が徐々に観光産業がよくなってきましたので増えてはきてはいるものの、やはり急激に旅行者数が増えてくると対応できないということで、部屋を空けざるを得なかったということがまた起きる可能性があります。それに対してどう増やしていくかということが重要になってくると思います。

例えば、外国人の採用というのを増やしていきたいところですが、外食産業については約2万人の人が外国人として採用されているわけですが、宿泊業に関してはまだまだ少ないという状況になります。こちらをどうやって増やしていくかということが重要になると思います。

東京都さんとしては、マッチングの仕組みをつくられていて、とてもよい成果を上げているとは思いますが、まだまだ絶対数が足りないという意味では、ていませぬ。国内外、例えば在留資格を持っている日本にいる外国人の方に向けて、もしくは海外そのものに出てに赴き、合同の説明会をするなど、もっとパイを増やしていくような活動が必要なのではないかと思えます。

また、最近はいろいろな外国人の応募はある方がチャレンジしてくださってはいるものの、なかなか日本語力N2という資格を持っている方が少ないというのも現状にはあります。なかなか、ホテル対応としては日本語がある程度は必要ということもありますので、そういった日本語のスキルというものを上げるための何か仕組みというものを講じていただく必要があるのではないかと思います。

また最後になりますが、DXというものは、消費の付加価値を上げる面も重要ですが、生産性を上げる意味でも必要になってくるわけですが、これがなかなか浸透しないということも鑑みて、東京都さんとして、都内にある宿泊施設の生産性をどのぐらい上げるのか、DXがどのぐらいの率まで導入されるべきなのか、目標を持ちながらそれに対して、何で対策をしていくのかということも掲げる。そして、例えば観光DXサミットのようなことをするとか、そういった啓蒙活動と実践を促すような活動をしていってはいかがかと思えますもしていただきたいです。

以上になります。

【篠原座長】

伊達委員、ありがとうございました。

順次御指名をさせていただきますが、スクリーンのほうを皆さん向いていらっしゃるの、スクリーンに近いほうから行ってもよろしいですか。田中委員

をお願いしてもよろしいですか。

【田中委員】

ありがとうございます。田中でございます。

本日は、篠原先生、小林先生、そして堀口さんより貴重な情報提供をありがとうございました。大変大いに参考になりました。

今日、東京都から最初に提示していただいた、問題提起のような切り口に沿ってものを感じておりましたので、そこからお話をしさせていただきます。たいと思うんですけれども、まず、観光戦略のベースにつきましても、東京プラス日本のどこかの別都市やですとか、東京の中の島しょ部、とか大自然の郊外型などとか、いろんなところに広がりが見える中において、今、数値だけの目標を概要版で示していただいていますけれども、やはり持続成長、ですとか日本全体を活性化していくための東京の役割とか、そういうものも鑑みながら継続して持続可能性というのを追求していくことは重視できたらとができたかなというふうに思います。

2点目に、データのこと、DX化についてのこともお話しいただきましたけれども、これは、データをとりながら化というのは、いろんなところにDXを活用していくということになると思いますけれども、やっぱり観光の担い手の人々自体がメディア的な存在であって、その方々が例えばリピーターをもっと獲得していくいけるために、リピーターを拡大するために、あるいは自分自身の現場の仕事の効率化を行い生産性を高めるために、DXで何ができるかということに皆さんが気づいて、そこに能力ある、スキルのある、専門力を有するのあるところの会社や人々が協力をして、それを実現していくということができると良いといいなというふうに思います。観光の担い手の人というのは、本当に自分自身がメディアであって、情報に乗せて運べる人なので、先ほどのリピーター拡大というのは、この人たちの力にかかっているところも結構あると思っています。マーケティング戦略だけではなくて、一人一人のこの力の向上、ここでやる気やとか仕事の魅力を拡大するということができると良いと思います。

もう一つは、キャッシュレス化を進めると、そこにデータが蓄積されてきますので、先ほど篠原先生が、オーバーツーリズムではなくて、もたらず価値のプラスの効果の見える化をお話くださいましたということでしたけれども、全てが一一決済とかですよね、まだまだアナログで進んでいるところがあります。けども、データ化すると、観光客の行動ですとか、嗜好ですとか、履歴等とかも見える化で全部分かってきますので、それを有効に活用していきながら観光の次なる課題を見いだすというふうなことで、観光消費動向も上げていくということができるのではないかと思います。

そのデータのところで、先ほど小林先生から「コペンペイ」を御紹介いただきました。けれども、やっぱり観光地で出は、で、私たちも行ったときに、そ

の場でやりたいことだけをやるか、リフレッシュということだけにとどまらずじゃなくて、考えてみると、そこの訪問先で何か自分自身にできるソーシャルインパクトみたいなものをつくりたいとか——それが体験とか参加にもなると思いますけれども、それ自体もデータでまた自分に返ってくるか——インセンティブとして返ってくるということもデータを使えばできると思いますので、そういうふうな観点でDXを捉えることができるかというふうに思いました。

最後、「江戸」についてですけれども、江戸はやっぱり、江戸という場所は今ないわけですが、でも、本当に歴史の中に入り込んで時空を超えるような体験が東京・江戸ではできるというふうな企画・コンセプト。またと、あと、江戸の価値を読み解いてを解体していくと、粋とか、しつらえとか、職人技とか、わび寂、にぎわいとか、先ほど堀口さんも伝えてくれた遊び心とか、たくさんのキーワードが出ます。これらのこういうところにすごい魅力が、があるかなというふうに思いますので、空間とか、町並みとか、祭りとか、季節性のイベントとか、江戸の花見、江戸の月見みたいな感じで——今日は、七夕ですが、江戸のやっぱり七夕とか、酉の市など、とか、そういうふうに来ると本当に時空を超えた体験ができることを示したいです。よみみたいなことと、小池都知事もおっしゃっている「アイコン化」みたいなことを推進していくと、その魅力が際立つなというふうに思いますし、浮世絵とモダンアートみたいなコンセプトはもう既に出されていますので、海外の観光客の方向けにいろんなものをリデザインしていくというふうなその取組も有効かというふうに思います。

対象者別に、先ほどアトキンソンさんに御提示いただいたように、やっぱり嗜好が皆さん違うと思いますので、同じ「江戸」の切り口においても、アジアの方には親しみやとかエンタメ性で売り出すほうがいいかもしれませんし、欧州の人には精神性とか奥深さを強調することが有効かもしれません。とかそういうところがあるかもしれませんしというところで、それらをういうのもひっくるめて、東京には江戸時代創業の会社ですとか、江戸時代に東京に進出してきた会社とか、江戸時代に誕生した商品というのがたくさんありますので、多様なそういう民間とも連携をして開発をしてはどうかというふうに思います。

以上、よろしくお願いたします。

【篠原座長】

ありがとうございました。

続きまして、小巻委員、お願いできますか。

【小巻委員】

サンリオエンターテイメントの小巻でございます。

今日は、篠原先生、小林先生、堀口さん、そしてデービッドさん、ありがと

うございます。非常に勉強になりました。ありがとうございます。本当に興味深いお話をたくさんいただきまして、江戸は、特に今「べらぼう」も非常に人気がありますし、本当にコンテンツとして非常に魅力が多いなというふうに思いましたし、DXの問題もろもろ、オーバーツーリズムの問題、今回も本当に豊富な知見をいただき、感謝申し上げます。

その中で、私、1つだけ皆さんに問題提起というか。供給するもの、たくさんあります。そして、DX化、AI化、非常に進んでいると思います。先ほどデービッドさんのお話の中で、関心層へのグローバルキャンペーンのお話がありました。そして、そこに2つ大きな、高いというところと、それからマナーがちょっとトゥーマッチというところとあったと思うんですけども、関心はあるけれども決め手が何だろうというところで、止めているものの1つに安心・安全、やはり日本は地震国ですので、防災、いざとなったときの安心感というのが実は決め手の課題の1つにあるんじゃないかなというふうに感じております。

と申しますのも、テーマパークをやっておりますので、月々、あるいは毎日の動員の動向というのはインバウンドが何名というところで非常に厳しくデータを取っているわけなんですけど、本当にまさかのことですが、7月5日の風評問題というのが意外に影響がありました。インバウンドの方、大分であれば韓国、台湾からのフライトが減便になるほどの影響がありました。私たち、特に地震を止めたりとか災害を止める力は自分たちにはないものの、やはりいざというときの防災、特にインバウンドの方、あるいは国内から九州に来た方、東京に来た方がいざというときにどうやって自分の命を守るのかといったところに一番DXが、もっともっとやれるべきことはあるのかなというふうに思っております。

テーマパークであれば、多言語化した動画であったりとかサイネージだったりとか、いざというときの防災のグッズの準備等々は今回また特に力を入れなければというふうに思ったところですけども、やはりこの大都市東京ですので、これだけ多くの方が、まして6,000万人を目指すという中で、このリスクストーリーのところ、しっかりとやっていく必要があるだろうというふうに思います。

いざというときにどうするのか、行こうと思っているけど行くのを止める課題の1つにそれがあるのではないかなというところで、いざというときはこういうDXが進んでいますよと、いざというときはこういう逃げ道をきちんとお示ししていますよというようなものをしっかりと用意をしてお迎えするというのが、やはり持続していく、成長していく観光施策の中でこれはどうしても優先順位の高い問題じゃないかなというふうに思いましたので、1つだけこのことを申し上げたいと思いました。

以上でございます。

【篠原座長】

ありがとうございました。

続きまして、根木委員、お願いできますか。

【根木委員】

よろしく申し上げます。

先ほどから新しい委員さんによるプレゼンテーション、素晴らしいものをありがとうございました。

僕のほうからは、事務局から御説明が最初にあった、観光客増加に伴う課題というところでいろんなもののアンケートが出ていたと思うんですけども、その中でごみの問題というものがあったと思うんですけども、僕、もともとスポーツをしていて、アスリートのメンバーたちと今スポーツ界から社会課題を解決するという取組で、今回、スポーツ基本計画の中でも環境というものが新しく出たりとか、本当に各問題として環境の取組となっている中で、僕、たまたまこの4月に鈴鹿のF1の大会、日本グランプリを視察に行かせていただきました。

僕らの時代から、F1といったら本当にガソリンをまき散らしてという、環境からほど遠いようなもののイメージが僕の中では当初はあったんですけども、実はいろいろ説明を聞かせてもらう中で、大会期間中まず26万6,000人が来れるという中で、大きいイベントの中では、最もかどうかわからないですけども、環境に配慮したエコシステムがあったりとか。もちろん、もともと今ガソリンが電気に替わったりとかという中でレースが行われているということも僕も知らなかったんですけども、その中で、やっぱり高い基準でサステナビリティのことを考えていて、それを承認しないとそもそも大会が開催されないという——世界大会ですよ、世界を連戦しているという、そういうことがそもそも今、世界の主流になっているというところがあるのを教えていただきました。

ちょっとびっくりした中では、鈴鹿サーキットの中は、ふだん公園があったりとか、いろんなものをしているんですけど、日本は本当にいろんなものがしっかりできていて、自販機なんかはもうありとあらゆるところにありますよね。日本の自販機は、まずペットボトルがあるんですけども、便利ないいものだと僕も思うんですけども、その大会自体がもうペットボトルは極力なくそうというところで動いているから、鈴鹿サーキット内のペットボトルが全てアルミ缶に替わっていたんですよ。でないとそもそも大会が開かれないであったりとか、リユースの食器はもちろんそうですね。

今、Jリーグ、Bリーグとかでもそうですね、会場の中にはもうペットボトルは持ち込まないとか、パリオリンピック・パラリンピックはまさしくそうですね。そういうもの自体が、日本の大きいイベント、そこに観光客が

たくさん来られるんですけれども、皆さん基本的にそれがスタンダードになっているのかな、大きい、海外から来られる方はほぼみんなというぐらいマイボトルを持っておられていて、会場の中でも給水所が本当にたくさんあって、パリのオリパラでもそうだったと思うんですけれども、皆さんが給水所でドリンクを入れてということが本当に当たり前のようにされているということがすごい変わったなというふうに僕は思ったもので、小林委員のほうから、観光するほど社会がよくなるというとてもすてきな言葉があったなと思ったんですけど、まさしく観光から社会課題を解決するという、座長のほうからもあったんですけども、そういうものが、実はこれが1つの主流ですけども、逆にそれがブランディングにもなっていく。東京観光の中で、社会課題をしっかりと考えた中の持続可能な観光地というところがまた魅力的になるのかなというふうに思いました。

また世界陸上も始まりますし、デフリンピックも始まりますし、世界陸上の中でも、ちょっと調べさせてもらったら、サステナビリティのプランがしっかりとその中に盛り込まれているんですよ。まだまだ知られていないところもいっぱいあるんですけれども、持続可能なプランの中で環境問題に取り組むということ自体がとても大切なことなのかなと思います。

ただ、これも座長のほうからお話があったように、事業体が様々に分かれているから、給水所をつくるというのはこれはどこが積極的にやっていくのかとか、まちづくりとかにも関係してくると思うんですけれども、こういうところの意識を高めながら、ポジティブに観光の中で環境を考えていくというものができたらなというふうに思いました。

以上です。

【篠原座長】

ありがとうございました。

そうしましたら、山田委員、お願いできますか。

【山田委員】

よろしく申し上げます。

今回、江戸ということで、もともとある東京の強みを活かすということも大事なのかなというふうに思っています。

江戸といえば、すごくサステナブルな生活をしていた。それを今また見直すという運動がいろんなところで起こっていると思うんですけれども、そもそも資源の――時代もあったとは思いますが、リユースが徹底されていたとか、都市も自然と共存している。ここら辺を――SDGsという言葉が今急に出てきて、2030年までの目標ですけども、そういうのを日本はそもそもしていたというところをきちんと出していくというところと、江戸といえば食、すし、江戸前ずしとかもあると思うんですけども、そこら辺というのを出していくの

に当たって、先ほどアトキンソンさんの話もありましたけども、マナーの話で、日本はすごくこれと言ったらそれというふうになってしまうけれども、広めるときにやっぱり間口を広げるということもすごく大切だと思っていて、伝統はこうでなければならぬ、ああでなければならぬというのも大事ですけれども、例えば食に関しても、東京はもうちょっとイノベティブジャパニーズキュイジーヌみたいなところを推していくとか、100年前の日本食と今の日本食は冷蔵庫のない時代からある時代が変わって変わってきているわけで、じゃあ、これからどういうふう発信するのかというときに、東京のような世界の中でもイノベティブなところからそういうことを発信していくということもありだなというふうに思いました。

今、ちょうど内閣府、観光DXサミットというものの審査員と委員とかいろいろやらせていただいている、やはり観光というところにおける人手不足というところ、これにAIをどういうふうに使っていくかというところで、今、東京はそんなに二次交通の問題はないと思うんですけども、例えばこの前、ちょうど先週、東京大学の安田講堂のほうでスポーツドクターズネットワークというもの——これはノーベル賞とハーバードと、いわゆるレイカーズ、ヤンキース、マンチェスター・ユナイテッド、レアル・マドリード、世界中のスポーツのヘッドドクターとのカンファレンスを東京でやらせていただいたんですけども、西洋医学と東洋医学の融合というところで、東京にいろいろなアジアならではの医療なども集まっているということで、その中でやはり医療ツーリズムというのも最近はある、そこに対するDXが進んでいなくて、オンライン診療はあるけれども、その先の例えば処方だったり配達というのが横が繋がっていない。観光も、それぞれ例えば食もすばらしい、ホテルもすばらしい、JRや飛行機もすばらしいけれども、その間のシームレスな観光というのがなかなかできないということで、その間をつなぐところというのにもう少しDXをきちんと使っていくということが大事だと思います。

時間もないので最後に、AIというのはツールでどんどん使っていくには大事だと思うんですけども、今回、東京、観光ということで、思い出とかというのは、体験というのは、五感で覚えていくもの、ただ見るとかただ何とかではなくてやはり五感で感じていくものなので、わざわざ来てくれて体験してもらおうという、それをリアルとAIとどういうふうに使分けしていくかという、その見せ方というのがすごく大切だと思います。この見せ方がちょっとやっぱり、日本はどうしても技術とかから入ってしまっ。例えば韓国の「白と黒のスプーン」という番組があるんですけども、そこに出ているシェフより日本のほうがすごいシェフがたくさんいるけれども、今、世界ではそのシェフ100人がすごいみたいになっちゃっているんですね。やっぱりそれは見せ方がすごくうまい。そういうのはやっぱりもう少し学ぶところもあって、そもそもコンテンツ

はすばらしいので、それをどう見せていくかというところにももう少し光を当てて論議していったらいいのではないかなと思いました。

以上です。

【篠原座長】

ありがとうございます。

続きまして、では、牧野委員、お願いできますか。

【牧野委員】

牧野です。皆さん、プレゼンテーションありがとうございました。ちょっとプレゼンテーションに関わる部分含めて幾つかコメントさせていただきたいと思います。

まず、座長がお話しされていた社会課題に取り組み、戦略産業として観光を位置づけるということに関しては、非常に同意というか、そのとおりだなと思って聞いておりまして、以前、デジタルマーケティングが観光に必要というときに人材がなかなかいないという話がありましたが、我々IT業界側の立場に立ってみると、デジタルの人材はたくさんいるんですね。ただ、観光業界がそれだけ魅力的なのかということだったりとか、あとは処遇の改善という意味で、それだけの待遇が得られるのかというところが難しかったところだと思っています。なので、やはり観光全体として大きな産業だということを広げていったりとか、あとは待遇の改善が必要だというふうには思っています。

アメリカのやつで見ると、カリフォルニアの観光局のCEOだと大体年収が2.4億円ぐらいだったりとか、あとサンフランシスコの市レベルの観光協会のCEOでも1.5億円で、そういう意味ではそれだけ大きな産業になり得るということだと思っただけですね。なので、そういったこともぜひ、多分日本でも、東京でも広げていくことが必要じゃないかなと思います。一足飛びで給料を上げることが難しいにしてもということですね、思っています。

あと、AIとDXに関してなんですが、余談ですが、さっきの小林委員のトリップアドバイザーの「Things to Do」に関しては、僕がちょうど在籍中にあれがもともと「Attractions」という英語だったんですね。なので、「観光」という言葉を使っていたんですけど、それがモノからコトに変わるというところで、「Things to Do」というのが2017年とか8年ぐらいに変わりました。でも、なかなかそれに適する日本語がなくて、そのため、結局のところ、「観光」をそのまま日本語で使ったというところで、残念ながらちょっとうまく当てはまるような日本語がないかなというふうには思ったというのが結論で「観光」になっているところになっています。

ちょっとDXのところに戻りますと、DX、いろいろ日本は進めてきたと思うんですが、AIの進化と普及が非常に速くなっておりまして、そういう意味では、今考えているDXが本当に来年正しいかというところが難しいふうになってきて

いると思います。特に旅行者側のAI利用というのが増えてくるというふうになっていまして、今、世界でチャットGPTが一番使われて、大体8億人ぐらいアクティブのユーザーがいるんですね。それだけ多くの人たちがいるということと、あと、一般的に個人として使われているユーザー数がどれだけいるかという数字が、なかなか最新のものがなかったんですけど、2004年の総務省の情報通信白書だと、日本だと個人で使っているのは9%で、それに対してアメリカが46%とか中国が56%ということで、日本で実感しているよりも、もっともっと幅広く使われているということだと思います。

そうなると、行動が変わってきていまして、実際のところ、僕のアメリカの同僚とかが来ると、旅行のことを調べるのがほぼチャットGPTになっているような形になっているので、検索行動とか、そういった情報の行動が変わってくるというふうになってきています。なので、短期的にも、ちょっとそういった検索であったりとか、自分で調べるというところからAIで調べるみたいな行動が変わってくると、プロモーションをどうするかというところが変わってくると思っていますし、あと、今年から少しずつ広まっていますが、エージェントというAIが今までの調べるだけではなくて予約とかまでやってくれるようになるという仕組みが徐々に出て、来年にかけてまた普及が始まると思っていますので、そうなると、オンラインに予約することに対応していないとそもそも予約につながらないということになってくるので、例えばその部分はむしろ本格的にやっていかなきゃいけないなというように、AIがどのような形で旅行者の行動を変えるかということに関しては調査も含めてやって、その対応を想定してやっていったDXに変えていくことが必要かなと思っています。

その中でもう一つ言うと、多言語対応みたいなことに関しても、旅行者側が自分で自動翻訳できるような仕組みになっているので、あまりもしかすると多言語対応にそこまで力を入れなくていいかもしれないとなると、人手不足の省力化につながっていくのではないかなというふうに思います。

最後に、江戸に関して、堀口委員のお話なんですけど、僕もすごく江戸時代の強みをちゃんと東京の強みとして活かすべきだと思っているところなんですけど、たまたまちょっと江東区の観光に関わっていて、この間出た調査の中ですごく衝撃というか驚きだったのは、江東区の区民でもエリアを分けて豊洲とか臨海部で見ると、先ほどの浅草も歌川広重が描いていますけど、広重が描いた亀戸天神というやっぱり江戸の貴重な財産だと思うんですけど、それを知らない人たちが、臨海部の人たちは4割ぐらい知らないというふうになっています。なので、そういう意味では、そういった江戸の文化みたいなものとか資源みたいなものを、区民であれ都民であれ、多くの人たちにまず知ってもらうところから始めなければいけないんじゃないかなというふうに思っております。

以上です。ありがとうございます。

【篠原座長】

ありがとうございました。

それでは、最後になりましたが、マリ委員にお願いいたします。

【マリ委員】

今日は、江戸の話も含めて、とても興味深いお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございます。

外国からのお客様をどこに案内するかは、私にとっていつも大きな課題です。今月もアメリカ、デンマーク、タイから来られる予定で、「日本に行ったら、どこに行けばいいのか」と必ず言われます。

リピーターの友人は、東京を通過点として、そこから行ったことのない場所へと足を伸ばす傾向があります。オーバーツーリズムという問題もありますが、先ほどアトキンソンさんもお話しされたように、インフラの整備とその維持が今最も重要だとおもいます。

これから観光地を整備していくことになった際は、その点をしっかり考える必要があると思います。

今なぜアメリカに行かずに、日本に多くの観光客が来ているのかというと、アメリカに行きたくない人が日本を選んでいるように感じます。

私は葉山に住んでいるのですが、鎌倉に行くと、最近ロシアからの観光客が非常に目立つのです。「なぜ日本に来ているのですか？」と声をかけてみると、「日本は受け入れてくれるから来ます」と答えられます。

ロシア人だけでなく、白人の観光客はアメリカやイギリスなどの国籍の方々と見られることがあり、そのような環境が、日本にとっては訪れやすさにつながっているのかもしれない。

ただ、今後、アメリカの政権が変わり、観光客がアメリカに行きやすくなった場合、逆に日本への訪問者数が減少することも想定できるので、持続可能なインフラ投資を進める必要があると思います。

また、外国人観光客が多く訪れる一方で、地方からも多くの日本人が東京を訪れています。国の施策と東京都の施策はいつも連携していたほうが良いと思います。お互いに役割は似ている部分もありますが、完全に一致させる必要はないかなと思います。

私は葉山に住んでいますが、仕事の関係で東京に泊まることも多いです。今、東京都が100円の観光税を導入していますが、これを少し上乘せしても良いのではないかと感じています。

また、食事についても、富裕層の中には、1食10万円もする高級レストランに行く方もいますが、多くの日本人は、やはり日本の料理は美味しくて安くて手頃だと感じています。外国に比べて気軽に楽しめるストリートフードも非常に清潔で安心です。こうしたところをもっと上手にアピールしていろいろなニ-

ズに込えられる環境づくりが、東京都の役割なのかなと思います。

デジタル化についても触れられましたが、私が3、4年前にいきましたアイルランドでは、ギネスの工場やトリニティ・カレッジの古い図書館など、すべて事前にデジタルで予約します。こうしたシステムは、人々が集中しすぎないためにも重要です。東京でも、観光客の動きを誘導したり混雑を抑えしたりするシステムの導入・強化が必要だと感じます。

パリは、観光客が最も多い都市の一つと言われますが、4月のイースターの時期に訪れると、観光客でとても賑わいます。その時期になるとパリ市民はほとんどいません。込み合うパリを離れてほかの場所に行くのです。バランスの取れた都市運営のひとつだと思います

アメリカのフロリダ州オーランド周辺では、夏休みの期間にテーマパークや観光関連で働く親子のために、学校の休暇と連動したフレックスタイム制を導入しています。

夏休みの最も忙しい時期には、親御さんたちがリゾート地で働き、子どもたちは学校に通います。そして、観光客が少し落ち着くタイミングで親御さんがお休みを取り、子どもたちと一緒に旅行に出かける。バランスの取れた仕組みが非常に上手にできていると思います。

新しく構築するのではなく、今あるインフラ整備をもっともっと上手に使いやすくしてさし上げるといいのではないかなと思うので、持続的な成長というものはそのようなところをちゃんと見据えた形でやっていただけるといいのではないかなと思います。

【篠原座長】

皆様、御協力いただきまして、若干時間を余すぐらいお時間がありますので、私が短くしてくださいと申し上げた都合上、皆さん短くしていただいたんですが、言い足りないということがたくさんあると思いますので、もしもう一言言いたいという方は挙手をしていただいて。どなたかいらっしゃいますか。お願いいたします。

【アトキンソン委員】

消費額の数字があるんですけど、その消費額の数字目標は、先ほど知事をお願いしましたとおりで、できれば消費額と経済波及効果を足して言ったほうがいいんじゃないかということだけお願いしたいと思います。

【篠原座長】

ありがとうございます。

ほかにございますか。会場のほうからも御意見をということで、今の御指摘を含めて、お答えを含めて何かございましたらお願いいたします。

【江村観光部長】

事務局でございます。

こちらの消費額については統計データでございますけれども、経済波及効果の取扱いも含めまして今後施策の参考にさせていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

【篠原座長】

ありがとうございます。

ほかはいかがでしょうか。お願いたします。

【小林委員】

今日は観光DXの話題をお話しさせていただきましたけれども、デジタルというのはもともと道具でしかないというふうに思いますが、ただ、人間に非常に力を与えてくれる道具だというふうに思っていますし、デジタルに関わる世界中の人がそう思って進めているのではんじゃないかと思っております。人間の創造力を支援し、高めるためのものだと思います。

今回のテーマである東京の持続的な、あるいは中長期的な観光の在り方を考える上でも、デジタルの力というのはいろいろな面で必要になると思っておりますし、もちろん生産性の向上ということもそうだと思いますし、あとは、観光を、実際に経験価値を高めるのは、先ほどもお話もさせていただきましたけれども、アントレプレナーだったり中小企業がやっぱり多いと思います。ですので、今、既に東京都さんの事業でもいろいろ進めていらっしゃるというふうに思いますが、資金調達からアントレプレナーの育成、サポート、そういったところのいわゆるエコシステムを形成できるようなことが観光分野にできれば、働く人たちもそうですし、あるいは、私、文化観光の推進にも今興味がありまして、江戸文化も非常に関わると思いますが、今、保護とか保全だけじゃなくて活用がどうあるべきかという議論も非常に盛んになっておりますので、そういったところにも貢献できる分野ではないかなというふうに思っておりますので、一言補足させていただきました。

ありがとうございます。

【篠原座長】

小林委員、ありがとうございます。

ほかに。お願いたします。

【山田委員】

私も先ほど観光DXという話をさせていただいたんですけれども、正直、もう日本は観光DXに乗り遅れちゃっているところもあると思っています、これからはうまくAIを使ってファインチューニングさせて、どんどん観光情報を飲ませて、AIともうまく付き合っていくながら、先ほど申し上げたように、五感を使ったリアルとAIの融合というほうに——どんどん話が、観光DXを議論している間に次はもうAI、どんどん新しいものが出てくるので、そこら辺にきちんと乗り遅れないようにうまく付き合いながらしていくことが大事なのかなと思いました。

【篠原座長】

ありがとうございます。

ほかによろしゅうございますか。

今回の議論のテーマ、東京都さんに設定していただいているのは、「観光の持続的な成長」ということで、成長で止めてあるということは、観光は伸ばしていくんだと、しかし、そこは持続的に伸びていくようなやり方をしながら成長させていくんだと、そういうテーマ設定なんだろうというふうに理解をしております。

そういう中で、今日皆様からいただいた御意見では、観光の持続的な成長に向けて、DXとか含むAIとか新しい技術を使って活用するですとか、インフラを整備しながら成長を支えていく。そのインフラの中には、マリさんがおっしゃったような社会システムのようなものを含めて、やはり日本の在り方も、対応の仕方も変えていく中で成長が図っていきけるんじゃないかということじゃないかというふうにお話を伺いながら感じました。

東京都にたくさん人が来ているといっても、まだまだ地域によっては差があって、そういう中での分散なり魅力の発信の中でもさらに持続的というところがまさに実現していけるのかもしれないし、今日、非常に多様な視点をいただいて、私、初めて参加して、これだけそれぞれの分野の第一人者の方々の御意見なので、大変参考になる視点がたくさんあったかと思えます。これを基に議論する、まとめていくのはなかなか東京都さんも大変だなと思えますけれども、東京都さんの人選もなかなか優れているなというふうに感じた次第でございます。

それでは、大体議論が今日のところは尽きたように思いますので、事務局のほうにお返しをしたいと思います。

【江村観光部長】

本日は、多岐にわたり貴重な御意見を賜りまして、誠にありがとうございました。

委員の皆様からいただいた御意見につきましては、今後の施策の推進に活かしてまいります。

次回の開催につきましては、改めてお知らせいたしますので、よろしくお願いいたします。

事務局からの連絡事項は以上でございます。

【篠原座長】

ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして本日の会議は終了いたします。

伊達さんも御参加ありがとうございました。

では、以上で終わります。ありがとうございました。